

初期仏教のコスモロジーと善悪

岡野 潔

(東北大学)

一

善悪のカルマとはコスモロジーの観点から見ると、宇宙を階層化し分化させる推進力である。

一つのブラフマ世界から神々の世界が分化し、さらに人間の世界が分化し、さらに悪趣の世界が分化する。宇宙を未分化状態から分化された状態へ推し進める力は、生きとし生けるものすべてが形成した業（カルマ）である。宇宙の未分化状態は善い状態である。それが悪しきカルマの働きによって、善い状態のままではいられなくなり、宇宙が階層に分化・分裂をし始め、ブラフマ世界の下へ下へと宇宙は開展してゆく。これは倫理的にいえば宇宙の悪化・墮落である。宇宙の最悪の状態つまり地獄に至るまで完全に分化しきった状態は永遠には続かない。宇宙の運動の開始から四〇小劫（成劫と住劫）が経過すると、宇宙の悪しきカルマが尽きて、善いカルマが優勢になる時代がくる。すると宇宙は分化状態から未分化状態へと戻り始める。悪趣が消失し、人間が消失し、神々は、一つのブラフマ世界への段階を遡ってゆく。最後に（滅劫の終わりに）そのブラフマ世界も消失する。

二

仏教の宇宙生成神話の最も古いものは『梵網経』（Brahmajāla-s. 2.2-2.6）と『パーティカ経』（Dāṭika-s. 2.15-2.17）に見られる。長部のこの両経はブラフマー神が創造神ではないことを強調するが、この両経の記事が仏教の宇宙開始期の神話をブラフマー神の誕生から語り始めることの典拠となった結果、後に形成された組織だった小乗の宇宙論書の多くは成劫の開展運動をブラフマー神から語り始めるのを常とするようになる。宇宙の開展運動はブラフマー神から始まるという当時の信念は、ブラフマー神の創造神としての役割を否定した後もしばらく揺るがなかったわけである。特に古い萌芽期のコスモロジーでは、ブラフマー神は単なる色界の神々の一種ではなく、宇宙の開展・帰滅運動の起点にして終点という役割を担って、宇宙観の中核に置かれていたことに注意されるべきである。

小乗仏教コスモロジーは、(1)『梵網経』『パーティカ経』『アッガンニャ経』にみられる「原始的（中核的な）図式」と、(2)アビダルマの時代までにその中核的な図式を拡大して作られた「拡大図式」の二段階に分けるのが最もわかりやすい。

第一の「原始的図式」においては、ブラフマー神（あるいは中性のブラフマン）が宇宙の開始者であるという、バラモン教から受け継いだ基本理念が背後にあるため、ブラフマー神が宇宙論の中で大きな意味を持っている。ブラフマーを頂点とし、地上の千世界（saṁsāra-loka）を底辺とする円錐形の宇宙を説者は思い浮かべていただきたい。円錐の頂点、ブラフマーが宇宙の起点である。ブラフマーが世界展開期の初めに生まれると、そこから下へ下へと世界の形成運動が広がっていったら、ブラフマーの下に低級な別種のブラフマーの神々の世界が出来、その下に欲界の神々

の世界が出来、その下に人間が住む地上世界が出来る。成劫から住劫を経て滅劫となり宇宙の帰滅運動が始まると、下の地獄や地上世界から世界は順に滅びて、上へ上へと世界破壊は円錐形の頂点にいるブラフマーめざして進んで行き、かつて宇宙の起点であったブラフマー自身が最後に終点となって滅びてしまう。この原始的な図式においては、ブラフマー神から地上世界までの円錐形の宇宙で、「ひとまとまり」の宇宙が想像されている。ただしこの原始的な図式においても、仏教徒の宇宙観として特徴的に、この円錐形の頂点のブラフマー神の遙か上にぼつんとアーバッサラ天（極光浄天）を置く。あたかもブラフマーという宇宙の胎が活動を始めるには別の世界から精子が落ちてくる必要があるかのように、アーバッサラ天で一人の衆生が寿命が尽きて、ブラフマ世界という宇宙の展開の起点に落ちてくることによって、創造神ブラフマーが誕生し、宇宙の創世運動が始まる。宇宙の胎とその起動者たる精子という発想が、このブラフマーとアーバッサラとの二段構造から成る元型的宇宙観の背後にあるように思われる。

阿含の時代の、このような原始的な図式が、アビダルマ編纂の時代には拡大される。その「拡大図式」において、宇宙観は上下に延長拡大され詳細化された。つまり原始的な図式においては基本的にブラフマーを頂点とする円錐状の宇宙とアーバッサラ天との二段構造でごく単純に考えられていたものが、拡大図式においてはアーバッサラ天の上の方向にさらに様々な高位の色界天と無色界天が加えられ、また地上世界の形成に関してはさらに地獄等の悪趣の世界の形成の歴史が加えられて、より包括的な大きな図式になる。両図式の決定的な違いは、原始的な図式においてはブラフマーが宇宙の中核的な役割を果たしていたのに、拡大図式においてはブラフマーの役割は弱められ、単なる色界の神々の一種にすぎなくなることである。つまり拡大図式とは、欲界・色界・無色界の三界というアビダルマ的な分類を用いて再整備した図式である。原始的な図式が地上からブラフマ世界までひとまとまりの宇宙を考えていたの

に対し、拡大図式は三界という概念で宇宙をひとまとまりに考えようとする。後者の図式に、前者の図式は完全に吸収されるに至った。原始的な図式に明確な二段構造は、ブラフマーから生まれてまた戻るといふ母胎回帰の神話からの脱却が仏教コスモロジーの基本理念であったことを示している。修行の目的はブラフマーに帰ることではなく、ブラフマーという宇宙の母胎を逃れることである。その独自の仏教徒の立場を説明するために、仏教徒は独自の宇宙観を構想し構築する必要があった。これが仏教徒の独自のコスモロジー形成の出発点であった。

三

上述の『梵網経』の宇宙生成神話は、「我と世界が一部分永遠であり一部分永遠でない」との誤った主張を斥けるために導入される。この主張は明らかに仏陀の「十四無記」（問われても答えるべきではない十四箇の宇宙論的問い）を意識している。「十四無記」に抵触するそのような主張を論駁するために、『梵網経』はしかし仏陀の「十四無記」の答え方とは異なった答え方をとった。仏陀の「十四無記」の答え方とは「沈黙」であり質問の無視であった。しかしこのような態度は仏陀だけがとれるもので、仏弟子には許されない。そのため『梵網経』は「沈黙」はとらずに、仏教徒による宇宙生成神話を示すことで、正面攻撃に出る。部分的永遠論つまり創造神だけは永遠であるという主張が真の宇宙神話への無知によるものであることを明らかにするため、真の宇宙神話が説かれる（ただしこの宇宙神話は実は「十四無記」と矛盾するものではない）。こうして、仏陀の「十四無記」から宇宙神話へ進む道が拓かれた。長阿含の古い層である『梵網経』がその道の出発点となり、その次の新しい層において長部の第三分に見られるコスモロジー的な諸経の記述がその道をさらに進める。長部の第三分には、上述の『パーティカ経』の宇宙開始期の神話

のほか『アッガンニャ経』(DN 27)の人間の種の誕生と社会の起源を語る神話や『転輪聖王師子吼経』(DN 26)の人寿十歳時の刀兵劫を語る神話もあり、コスモロジー的な記述が集中している。これらの経は、阿含の中でも最も新しく形成された層に属するものと思われ、コスモロジーへの関心の高まりという時代的な変化が編集に反映されたと見られる。こうして阿含の中に断片的ながら存在することを許されたコスモロジー的神話の記述は、次に来る教理体系化の時代に、包括的コスモロジーをつくるための土台となった。『パーティカ経』『梵網経』の語る宇宙開始期の神話と、『アッガンニャ経』の人間と社会の起源を語る神話と、『転輪聖王師子吼経』の人寿の増減と刀兵劫の神話、この三者がともに時間軸の上に置かれて連続的な歴史として整理される。未来の世界の終末を描いた経としては『七日経』(AN VII 62 Suriyam)がある。宇宙開始期の神話と人類起源神話を結合し、さらに人寿の増減と刀兵劫の神話を中間劫の理論の基礎と考え、『七日経』の器世間の終末神話と結合するとき、宇宙の開始から終末までの連続し完結した歴史の外枠を構想することが出来るが、このように、『パーティカ経』／『梵網経』＋『アッガンニャ経』＋『転輪聖王師子吼経』＋『七日経』という、大きく四つの部分から成る阿含経中の神話材料の組立によって、宇宙の通史的な記述が出来ることが出来ることを素直な形で示しているのが、最近発見された正量部のカーヴィヤ Mahasamvartankatha (略号 MSK) ならびにその作品の直接の源泉である『文献X』である。これらの文献においてはかなり上記の阿含の材料が可視的になっている。

包括的で規模の大きなコスモロジー文献として長阿含の『世記経』があるが、私はこの『世記経』の「原形」は恐らく増壹阿含の卷第三十三「七日用品」の第一経のようなかたちであったと推測する。この経では『七日経』の終末神話と『アッガンニャ経』の起源神話が結合されて、首尾が完結した宇宙の歴史となっていることが注目される。終末

神話の後に起源神話が来るのは世界の歴史的経過を成住壞空ではなく壞空成住の順序で記述する古い伝統に従ったからであろう。この「七日用品」第一経がなしとげた『七日経』＋『アッガンニャ経』の結合こそは、記念すべき終末論と起源論の結婚と呼ぶべきで、仏教のあらゆる包括的な歴史コスモロジー記述の出発点になったと見てよい。この結合によって出来た経の枠構造の上に、どしどし阿含の他の断片やコスモロジー記述を付加増広してゆけば、長阿含の『世記経』が出来る。

四

こうして体系的な段階に至った仏教の宇宙生成神話を整理してみると、カルマの力で宇宙が未分化から分化へすすむ運動となる。詳細には次の如くである…

第一段階…神々の誕生

一つのブラフマ世界の誕生から宇宙の成劫が始まる。

未分化状態の一つのブラフマ世界が分化して、派生状態として多くのブラフマ世界が出来る。さらに派生状態として欲界の神々ができる。具体的には、諸衆生のカルマの支配力によって成劫が開始されると、その最初の運動として神の住居が準備され、一柱のブラフマー神が生まれる。その大ブラフマー神より容姿や神通力が劣る他の大勢のブラフマー神たちも続いて生まれ、ブラフマ世界は三種ないし四種のブラフマ世界の神々（ブラフマ世界の名称と順序は部派によって異なる）に分化し、それからその色界の神々の下方に、より墮落した形態の神々が次々に分化して、六種

の欲界の神々が出来る。これら最後に生じた神々の住居はすでに地上世界に近い。

正量部のコスモロジー文献である文献XとMSKは、この第一段階から次の第二段階の最後までを一直線に時間軸に沿って記述している。その記述より簡潔でやや抽象的であるが、有部の俱舍論世間品も (ed. Pradhan, p. 179) ほぼ同様の形成の順序を記している。

第二段階：人間の誕生

神々が分化して、派生状態として原人が生まれ、それが人間となる。地上世界に生まれた原人たちはもともと神の一種の如き姿をもっていた。体から光を発し、虚空を飛び、歓喜を食べて、極めて長い寿命をもつ。神に近かった原人が食によって墮落して未分化状態から分化が始まり、美しい人と醜い人が分かれ、また男と女に分かれる。人は社会慣習として階層的な四種カーストに分かれる。

アッガンニヤ経の神話はこちらまでしか記述しないが、この後にもう一段階あることは明らかである。それは悪趣の誕生である。文献XとMSKはアッガンニヤ経の神話の続きを記して、畜生の出現を語る。四種カーストが生じ、その下にチャンドーラ階級が生じた後の出来事として、畜生の出現が語られる。人間全般の墮落の後に、死後悪業の故に悪趣に生まれ落ちる衆生も出てくるわけである。

第三段階：悪趣の誕生

未分化状態の人間の分化が終了し人間社会の墮落化が始まった後に、人間から三悪趣ないし四悪趣が分かれ出る。

五道ないし六道がこうして出来る。地獄の衆生が生まれるのは順序として人間の発生の後である。（ただし器世間としての地獄という場所がいつ形成されるかについては、部派によって意見が異なり、正量部は器世間の形成と衆生世間の形成は同時平行的に進んでゆくと考えるが、有部は衆生世間の形成の前に、初めに一気に地獄世界を含むすべての器世間が形成されると考える。）

五

このように、宇宙を未分化状態から分化された状態へ（成劫）、分化された状態から未分化状態へ（減劫）、きっちり定められた時間ごとに推し進める力が、衆生のカルマである。カルマは善か不善かのどちらかである。宇宙の展開運動は下方への墮落運動に他ならず、そこに働いているカルマは苦をめぐすカルマであり、不善なるものである。つまり宇宙を未分化から分化へ、一から多様へと開展してゆく力をもつのは悪の行為である。悪業があるからこそ、宇宙は多様なものでありうるのである。その逆の方向、分化から未分化へ、多様から一へと収縮させてゆく力をもつのは善の行為である。

仏教コスモロジーには——基本的な心的態度として——宇宙的〈母胎回帰願望〉とも呼ぶべき性質がある。母胎の中で、胎児は一なる状態で快く眠っている。それは善なる状態である。ところが誕生によって外界に投げ出されると、そこにあるのは悪に満ちた世界である。悪があるからこそ人は大人になるわけであるが、大人になってからも始源の未分化の状態を懐かしく思う。そのような始源への回帰の心理の投影がコスモロジーとなって、宇宙の生成と帰滅が説明されているかのように思える。現代人の感覚では世界の生成・発展こそが善であり、帰滅は悪いことである

が、仏教コスモロジーではそれはさかさまである。宇宙の生成発展とは善なる状態から悪なる状態へ入り込んでゆくことであり、宇宙の衰滅回帰とは悪なる状態から善なる状態に戻って行くことである。ここから、仏教の墮落史観が出てくる。

しかし仏教の歴史観を、母なる宇宙の始源の時への回帰願望の投影として単純化するならばそれは部分的にしか正しくない。宗教学の「始源の時への回帰」という単純な図式では説明しきれない。仏教コスモロジーはもつと意味深く、そのためやや複雑である。宇宙が回帰してゆく先は「涅槃」の世界ではない。回帰先は宇宙の母胎たるブラフマ世界をふくむ色界の領域である（この点やや言葉が複雑なのは、上述の「原始的な図式」から「拡大図式」への移行により、ブラフマ世界よりも色界の概念が強調されたからである）。宇宙の展開と収縮の運動の発生源は色界である。無色界から始まるわけではないのは、展開と収縮の宇宙的运动が微細であれ粗大であれ物質（色）の運動であるからである。宇宙の展開と収縮の運動は大抵の場合（六四回中、五六回は）大ブラフマー神の世界の発生から始まる。その世界の消滅で終わる。宇宙の破壊が火か水か風かで、色界のどの世界が破壊の境界となるかは異なるが、宇宙の回帰の運動に乗っているだけで、勞せずして衆生は、必ず色界のどこかの世界の高みまで到達できる。しかしそれは最終的な問題の解決にならない。つまりこういえよう。あらゆる衆生はいつか必ず（ブラフマ世界に代表される）色界という母胎に戻ることができる。しかし母胎に戻っても、いつかはまた母胎の外に排出される。母胎に戻ることとは宇宙の苦しみの根本的な解決ではない。問題の根本的な解決は涅槃である。涅槃の理想は、快なる宇宙的な母胎Ⅱブラフマ世界への回帰にあるのではなく、そのような母胎をつくる存在である宇宙の不滅不変の法（無為法）と一体化することである。

釈迦牟尼の教え以前には、快なる宇宙子宮Ⅱブラフマンに帰ることが修道論の目的であった。釈迦牟尼以後は、宇宙子宮を越えることが修道論の目的となる。仏教の最終的な目的は、欲界・色界・無色界から成る有為の世界を越えて、無為の涅槃の世界に入ることである。宇宙（有為法）というカルマの子宮から脱却し、善悪を越えている無漏の法性と一体化する手段は、悟りであり世界を如実に認識することである。以上からいえることは、仏教コスモロジーは単なる墮落史観Ⅱ子宮回帰史観の世界観にとどまらないということである。宇宙の母胎Ⅱブラフマンへの「永劫回帰の神話」は確かにインドの宗教コスモロジーの土台ではあるが、その土台の上にもう一段階、別のレベルの階を建てて、そこから宇宙の母胎を決定的に逃れる脱出路を造るというのが、仏教コスモロジーのとった方法であるからである。部派仏教が、コスモロジーという「神話の集合体」をうまく組み上げるために、設計理念として恐らく意識していたことは、コスモロジー理論が宇宙の起源を完全には説明できないこと（完全に説明し尽くすべきではないこと）、宇宙の展開運動と収縮運動を説明せざるを得ない時にもブラフマ世界あるいはその一―二段階上の世界の誕生と消滅までで説明をやめるべきであること、それ以上に宇宙の起源を問うならば、それこそ「十四無記」の問題になってしまふこと、そしてブラフマ世界への回帰自体の中には永遠に全宇宙的な衆生の苦しみに対する最終的な問題の解決はないということ——以上を、宇宙の図式の上で断り書きをすることであると思われる。ここまで明らかにすれば仏教コスモロジーの役割は終わり、後は修道論と「十四無記」の仏陀の智慧だけが知る世界となる。

六

「善と悪」というテーマに戻る。仏教において善悪とは無前提的に存在するものである。悪しきカルマが宇宙から

無くなったとしてもカルマがもつ善悪の座標軸の悪がなくなるわけではない。宇宙とは無始無終の運動であり、運動とはカルマであり、カルマは善悪による。すると善悪こそが宇宙の謎である。悪が存在する理由は誰にも分からないが、悪は人間の認識の拡大に欠かせない。人は生まれて否応なく悪を経験するが、誰でも何度か「悪に満ちた現実から逃れたい」とか「始源の純一に善なる世界に回帰したい」という秘かな願いをもつ。しかし退行し幼児化するかたちで、始源の神話に戻ろうとすることは許されない。精神の拡大のためにはどうしても悪なる複雑な世界に直面しなくてはならない。実在する悪は長い時をかけて複雑に形成された、善と混じり合ったものであり、それゆえ現実の世界はジレンマに満ちているが、目をそむけたり逃げたりするわけにはいかない。悪なる状況をつぶさに知らなくてはならない。その認識が大人になるということであるが、その認識はそれまでの宇宙観に変化をもたらす。善なる世界の状態・時代を希求するばかりでは、最終的な解決にはならない。善なる宇宙の胎盤をめざすことは一時避難に他ならず、胎盤を越えることにはつながらない。善なる宇宙の胎盤から再び絶望的な世界状況が反復されるのであるとしたら、問題の解決は宇宙の胎盤に戻るのではなく、むしろ悪によって宇宙が多様に展開した状況の中で現実を根元的に省察し、世界の絶望的な状況への認識を悟りの契機にすることにあり。仏陀の慈悲と悟りは世界悪を契機とする。悟りの観点からみれば、悪は善と変わらない価値をもつ。

仏教コスモロジーは、世界の善からの展開と善への回帰の運動だけで宇宙の「目的」を説明してしまわず、本当のところは十四無記の立場をとり続けている。コスモロジーは逃避と避難のための世界観であってはならないし、母胎回帰願望の神話であってはならない。仏教コスモロジーは色界以下の世界の形成と破壊までで説明を止めて、それ以上の高い世界があることを示唆し、大劫の周期を越えた世界があることを示唆し、しかし宇宙の本当の始源について

は不可知論を取る。色界の最高處と無色界の世界がどうやって出来たのかは誰も知らない。つまり理論的に余白として残しておく。宇宙の最上階に対する沈黙は宇宙の全体的な企図に対する沈黙である。宇宙の形成力が衆生のカルマの相続であるとしても、宇宙の第一原因となる最初の衆生のカルマについては語るべきではない。ここもわざと余白として語らずに残しておく。わざと問題にしない。すべてを言葉で説明し尽くしてはならないというブレーキがかかっている。このような、仏陀の無記から始まる宇宙不可知論の伝統とも呼べるものは、常に実践的な要請に基づいているのであろう。要するにコスモロジーとは修道の準備段階である。それは仏陀の無記という大きなブラック・ボックスを根底に抱えた理論である。理論に空白を作っておき、世界を創ったカルマについてはほとんど語らず、今現在の衆生の善悪のカルマだけを問題とする。菩薩はどこにも逃避せず、悪に満ちた現実世界に戻ってくる。このように、仏教コスモロジーはすぐれて実践的な性質の宇宙観であると私たちは評価できるのであろう。部派仏教においても沈黙が必要な箇所では沈黙をわかまえて、大乘においても空の思想を適用して実践的な不可知論でありつづようとした。

七

次に、善悪に関するやや現実的な問題について意見を述べてみたい。仏教コスモロジーは宇宙的に身分・階層・男女の差別相を固定するか、という問題である。仏教コスモロジーがその土台的骨組みの一部として採用したアツガンニャ神話は、身分階級をあくまで人為的に作られたものと見て、歴史的に四姓成立の起源を説明している。ここには身分差別を固定する見方はない。まったく逆である。『アツガンニャ経』は男女や種の差別の固定化を否定する。仏陀はここで起源を語るふりをして起源の不在を語る。男と女の違い、また神と人間の違い、人間と畜生の違いなど、

あらゆる種の違いの発生は、或る時点で歴史的な文脈で起こった事件であり、カルマの歴史的な集積の結果であることがアッガンニャ神話によって示される。事件が大劫ごとに同じ様に反復される事件であったとしても、しかし種の違い、身分や階級の違いを静止的に、永遠に固定的なものとして語ることをしない。それはあくまで動的に、歴史的に、形成されるものである。あたかもダーウィンの進化論が、種の違いというものを固定したものを見ず、時間の中で形成されてきたものと見なしたように、仏教コスモロジーも、宇宙における種の形成・階層宇宙の成立をあくまで時間の流れの中でカルマによって生まれたものと見なす。宇宙のすべての現象をカルマだけで説明するということは、すべてを時間のうちで生成したものと見なす歴史主義をとるということである。一般的に宇宙の秩序であり真理だと信じられているものが実は歴史的な根拠から作り出されたものにすぎないこと、それを示すのがアッガンニャ神話に代表されるコスモロジー（コスモロジーに適用された縁起の思想）である。

仏教コスモロジーは宇宙の運動の推進力をあくまで個々の生命が作り出すカルマに置くことによって、運命論者と袂を分かっている。たしかに、宇宙と人類の壮大なる歴史は大劫ごとに同じ形式で反復されるものと仏教は認めている。しかし私の考えでは、「結果的に」そうなるのであって、あらかじめ予定されているのではない。カルマの連鎖が結果的に反復の形をとっている歴史にすぎない。反復される宇宙の「形式」の永遠性を強調すべきではない。仏教コスモロジーは無時間的な宇宙の差別相を説くことが本旨ではないからである。たしかに宇宙は反復的なたたよって、持続している。しかし「反復」の軌道である宇宙の形式に強調点を置くと、無時間的なものになる。無時間的に眺めると、すべての宇宙階層の分化の事件が（例えば人類の起源におけるシュードラ階級の成立も含めて）あらかじめ決まっていたことになる。予定論になってしまう。そうではなくて、持続のかたちが、結果的に反復的な運動を

とるのではないか。このぎりぎりの一点で、仏教は宇宙の永遠予定論者ではないと私は理解している。もし宇宙の運動の形式を法性と呼ぶなら、たしかに仏教徒はそのような宇宙の形式を認めている。しかし法性とは何かという問題は難問である。仏教徒でも意見が分かれる。衆生のカルマと因果法則と相互依存の法則だけで宇宙の最初の運動や分化・未分化の定期的反復的運動を説明するのは論理的にはやや無理がある。パラドックスがここに隠れている。宇宙を論じればかならず論者は形而上学的パラドックスに突き当たるのであり、「十四無記」という仏陀の不可知論的ブラック・ボックスの思想が救うのが、この宇宙論的パラドックスである。仏陀が宇宙論に対して示した沈黙の智慧が、人を安易に永遠予定論者や身分固定論者になることから救って、現実にし戻してくれる。現実の世界のあり方を改善するためには、宇宙はカルマだけで説明されなくてはならない。この実践上の要請から、そして人間の認識の限界の自覚から、仏教コスモロジーは宇宙論でありつつ、つねに越えてはならない一線をもつ。

* 紙幅の都合上、注は省かせていただいた。